

## ドストエフスキイとレスコフ

—その関わりについての覚書—

岩 浅 武 久

はじめに

フォードル・ドストエフスキイ(一八二一—一八八一)とニコライ・レスコフ(一八三一—一八九五)という二人のロシア作家を比較する試みは、すでに幾人かの研究者によっておこなわれている。レスコフに関する最初のモノグラフィ―的批評を公にしたヴォルインスキイをはじめとして、作家レスコフの息子アンドレイ・レスコフの評伝『ニコライ・セミョーノヴィチ・レスコフ』<sup>(2)</sup>においても、グロスマンの著作<sup>(3)</sup>でも、すでに両者の関係に触れられており、ドルーゴフの著書<sup>(4)</sup>にも、わずかながらこれに関する指摘があるが、両者の本格的な比較研究はヴィノグラードフの著作<sup>(5)</sup>(一九六一)を待たねばならなかった。ヴィノグラードフは、とくに両作家の創作方法やスタイルの基盤の違いに目を注ぎ、その視点から両作家の一八七〇年代の論争に光を当てた。ヴィノグラードフのあと十年を経て、逆に両作家の共通点に光を当てようとした論文が登場し、一九七一年

にはプリフリトワードフが、一九七五年にはヴィドゥケツカヤが、それぞれ「ドストエフスキイとレスコフ」と題する論文を発表している<sup>(6)</sup>。また一八八〇年代におけるレスコフとドストエフスキイの関係を見るうえで、ボガエフスカヤの論文<sup>(7)</sup>も見落とせない。ボガエフスカヤは未発表資料等を含めて検討することにより、主としてドストエフスキイ死後のレスコフの発言に的をしぼって、これを紹介している。そのほか、部分的ながら両作家の関係について重要な指摘をおこなっているトロイツキイとストリャローワの著書<sup>(8)</sup>、そして両作家の関係についての諸研究を俯瞰して研究課題を整理したチューホワの論文をそれに加えれば、ロシアおよびソ連における研究のほぼすべてをあげたことになる。本稿では、こうした研究に助けられつつ、あらためてロシア文学の文脈のなかでドストエフスキイとレスコフの関係を問い直すために、まず両者がたがいに相手を意識しておこなった発言などの事実関係にしぼって光を当ててみたい。両作家の比較をおこなうときに、両者<sup>(9)</sup>と他の同時代作家の諸作品の詳細にわたる検討がその出発点になるべきことはよく承知しているが、本稿は、そうした予備作業のひとつとしてのおぼえ書きである。

## I

最初に一八六〇年代における両作家の関係に目を向けてみよう。レスコフのすぐれた小説『ムツェンスク郡のマクベス夫人』がドストエフスキイ兄弟の雑誌『エポーハ』(一八六五年

一月号)に掲載されたということは比較的よく知られている。しかし両者の関係はさらに数年をさかのぼることができる。レスコフはすでに一八六一年の『ヴレーミヤ』誌十二月号に「ロシアの移住民と政治経済委員会について」という論文を寄せ、さらに翌六二年二月号には「国民の健康問題とロシアの医者階級の利益」という論文を寄せている。レスコフが文筆活動を開始したのは一八六〇年のことで、これらの論文が書かれたのは、その翌年ないし翌々年、すなわちレスコフがペテルブルグに移り住んで一年足らずの時期のことである。前者の論文は、『ヴレーミヤ』九月号に M. B. の署名で掲載された「植民問題」という論文に対する論評として書かれたもので、ここではレスコフ自身も参加したロシア地理協会・政治経済委員会でのこの問題をめぐる討論への反省とともにシベリヤ移住民の問題が具体的かつ肯定的に述べられている。この論文が『ヴレーミヤ』に掲載されるにいたった経緯は明らかでないが、レスコフ自身が論文のなかで、これを「手紙」と呼んでいることなどから判断すると、これは投稿形式で編集部へ寄せられた論文であるかと思われる。ドストエフスキイは編集者の脚注のかたちでこの論文を評価し、ロシアの植民問題について、この分野に詳しい人達の執筆を歓迎すると述べている。この脚注の言葉の背後にシベリヤ流刑体験者としてのドストエフスキイの視線を見ることは誤りではないだろう。後者の論文は、レスコフがすでに一八六〇年にキエフの新聞『現代医学』に執筆した論文「徴兵局の医者について数言」「ロシアの警察医について」「ロシアの警

察医」の論旨にそって、あらためてロシアの医療問題を論じたもので、ここでは、一般民衆が死亡率の高い病院や医者に不信感を抱き、医療も受けずに死んでゆく有様、医者が雑務に追われて治療や研究に専念できず、また報酬が少ないために賄賂なしてはやってゆけないでいる状態などが、暗い色調で描かれている。レスコフはここで医者の立場と待遇の改善を呼びかけているのである。この医療問題は、同じ年の五月号、翌一八六二年九月号の『ヴレーミヤ』誌でもとり上げられている。晩年の日々をもっぱらドストエフスキイ研究に打ちこんだネチャエフ女史は、『ヴレーミヤ』誌でのこうした問題のとり上げかたに触れて、医者と民衆の相互関係のテーマがこの時期のドストエフスキイにとつてとくに身近なものであったことを指摘し、貧民病院の医者の家庭に育ったドストエフスキイ兄弟はこの問題に特別の注意を払わずにいられたのだと述べている。おそらくその指摘は正しい。ネチャエフはさらに、同じこの時期の『ヴレーミヤ』誌に小説『死の家の記録』が連載されており、ことに一八六二年の二月号に掲載された『死の家の記録』第二部の第二章、第三章(「病院」)のなかで、ほかならぬこの問題がとり上げられていることを指摘している。ネチャエフは、当時のドストエフスキイの関心の在処の問題として、こうした事実を並列的に記述しているにすぎないが、ドストエフスキイとレスコフの関係の追求を課題とするわれわれとしては、レスコフの論文と『死の家の記録』の該当箇所が『ヴレーミヤ』誌の同じ号に掲載されているという点に注目せず

はいられない。つまり『死の家の記録』の文脈を辿るとき、医療問題に対する両者の共通の関心という枠をこえて、明らかに編集者ドストエフスキイのレスコフ論文に対する反応をそこに読みとることができる。このことは、かりに『死の家の記録』に話を限定するにせよ（もともと、筆者はそうした限定の必要性を認めないが）、ドストエフスキイの創作方法そのものに関わる問題を提出していると言えよう。

ここから二人の關係は一八六五年の『エポーハ』誌への小説『わが郡のマクベス夫人』の掲載<sup>(18)</sup>へと続くわけだが、この間に両作家がたがいに相手に関して直接的な言及をおこなったことを示す資料は見当たらないにしても、二人にとって相手をつよく意識する機会はいくつかあったと思われる。たとえば一八六二年五月末のペテルブルグの火事にまつわるレスコフの筆禍事件<sup>(19)</sup>は、この火事をめぐる論文を『ヴレーミヤ』誌に載せようとして結局検閲当局の許可がおりなかったという体験をもつドストエフスキイにとって無関心ではいらなかったであろう。またドストエフスキイの最初の外国旅行のあと、レスコフが旅行経路こそちがえ、数カ月のずれでパリに滞在し同じくドストエフスキイと数カ月のずれでその旅行記録を発表している<sup>(20)</sup>という事実を考えれば、レスコフにとってドストエフスキイが意識せざるを得ない対象であり続けたと見るのが自然だろう。さらにレスコフは、一八六三年四月（つまりパリからの帰国後まもない時期）に、作家の兄ミハイル・ドストエフスキイに手紙を送り、自分の原稿がドストエフスキイ兄弟の雑誌に採用されるか

否かをたずね、もしも採用されないならば、それを返却してくれるようにと頼んでいる<sup>(21)</sup>。こうした経緯は、ドストエフスキイに対するレスコフの関心の深さを物語っている。その原稿は四月三十日にレスコフに返却されたとのことだが、原稿の内容については不明のままである<sup>(22)</sup>。

レスコフは、当時すでに故人となっていたアポロン・グリゴリーエフ等の勧めにしたがって、ストライーホフ経由で『わが郡のマクベス夫人』の原稿を編集部へ送り、これが早速『エポーハ』の一月号に掲載された。レスコフは、のちに一八八八年になって、リーネフあての手紙のなかで、小説『ムツェンスク郡のマクベス夫人』の監獄生活の描写は、現場を観察することなく、いわば想像で書いたものだが、これについてドストエフスキイは現場がじつに正確に再現されていると見ていたことを伝えている。レスコフは、当時この作品のほかにもロシヤのさまざまな層の女性像を小説に描いてそれを『エポーハ』誌に提供するプランを持っており、『わが郡のマクベス夫人』はその第一弾であることをストライーホフあての手紙のなかで述べている<sup>(23)</sup>。この作品に対するドストエフスキイの反応からすれば、そのプランは大いに実現可能かと思われたが、しかし結局のところ、それは実現されなかった。ドストエフスキイは、レスコフの再三にわたる催促にもかかわらず、この作品の原稿料を生涯ついに支払わず、それが原因でドストエフスキイとレスコフの關係にひとつの溝が生じることになるのである。

## II

一八七〇年代は、二人の対照的な発言がもつと鮮明にあらわされた時期だと言ふことができる。それは一八七三年の両者の論争を指して言うのだが、その論争に話を移す前に、ドストエフスキイがマイコフにあてた手紙(一八七一・一・一八)に触れておかねばならない。ドストエフスキイは、四年余りにわたる外国滞在の最後の年の一月にドレスデンから投函したこの手紙でレスコフの長篇『いがみ合い』の読後感を書いている。ドストエフスキイは、『ロシア報知』誌への『悪黨』の掲載と重なり合う時期に同じ『ロシア報知』誌に連載されていたレスコフの『いがみ合い』に触れて、「でたらめが多く、わけのわからないことが多くて、まるで月世界の出来事のように」と書きながら、そこに描かれた個々のタイプ、なかでもヴァンスコックの描写を絶讃して、ゴゴリにもあれ以上に典型的で正確なものではなかったと述べ、さらに「たとえ六〇年代初頭のニヒリズムが死滅しても、この人物は永遠の記憶に残るでしょう。これは天才的です」とまで言い切っている。そこに続いてドストエフスキイは手紙のなかで「わが文学におけるステブニツキイ(2)の運命は驚くべきものです。ステブニツキイのような現象は、批判的かつもう少しまじめに説明する価値ではありませんか」と述べている。レスコフは一八八四年の手紙のなかでこのドストエフスキイの感想に触れて、ドストエフスキイが自分について、個人的な書簡では賞讃しながら、印刷物ではけなそ

うと努めていたと回想している(28)。これは、その頃に発表されたドストエフスキイの書簡を読んだ感想でもあり、文面から見ると、レスコフはドストエフスキイのそうした態度に一種の狡猾さを見ていたようだが、実際のところドストエフスキイのレスコフ評価にそのような二重性があったのだろうか。それとも、このドストエフスキイの手紙が書かれた一八七一年から一八七三年の論争にいたるまでの二年間にドストエフスキイのレスコフ評価が変化したと見るべきだろうか。

一八七三年の二人の論争は、ドストエフスキイの『作家の日記』の「仮装人物」の章に克明に読みとることができる。しかしそれに先立ってドストエフスキイは、同じ一八七三年の『グラジダニン』誌第四号に、レスコフの『僧院の人びと』についての匿名書評を書き、さらに『作家の日記』第七章には、レスコフの『封印された天使』を批評した「受難の顔」という文章を書いている。まず「僧院の人びと」についての匿名書評だが、これをドストエフスキイの筆になるものと判定したのはヴィノグラードフである。ヴィノグラードフはテキストを分析した結果、この文章の語彙の用い方がドストエフスキイの文体に特有のものであることをつきとめ、さらにこの書評の姿勢や問題意識が当時のドストエフスキイの他の文章と共通していることを筆者確定の論拠としている。この匿名書評でドストエフスキイは、司祭長トゥベローゾフのタイプが創り出されたことを高く評価する反面、テルモシヨーフ、ビジュエキナなどを高

しこれは、全体として見れば、『僧院の人びと』に対する好意的な批評だと言ふことができる。

つぎに『作家の日記』第七章の「受難の顔」だが、ドストエフスキイはこのなかで、『封印された天使』の、イコンをめぐる分離派教徒達とイギリス人とのやりとりの場面の叙述などを賞讃しながらも、その一方で、イコンから封印がはがれていたという奇跡を合理的に説明しようと作者が焦り、それによって小説の真实性が失われたことを指摘している。ドストエフスキイの指摘はもっともなもので、奇跡を見て改宗した分離派教徒が、奇跡の種が明らかになつたあとも正教にとどまつたという話の展開には多少の無理がある。だがこの文章の後半を読むと、ドストエフスキイの視線は、もはやレスコフの小説描写にはではなく、むしろ当時のロシアの主教の役割や僧侶の状態で注がれているのである。つまりここでは、かつてドストエフスキイがマイコフあての手紙で書いたレスコフへの直接的な関心はすでに薄れており、レスコフという現象は説明する価値があると述べた手紙の熱意は、少なくとも表面上はドストエフスキイから姿を消している。

ドストエフスキイのレスコフ評価の変化（あるいは評価の複雑さ）を示すもうひとつのできごとがある。レスコフは、一八七三年三月のメシチェルスキイあての手紙で明らかのように、代表作のひとつとも見られる『魅せられた旅人』の原稿をメシチェルスキイ經由でドストエフスキイ編集の『グラジダニン』誌に送っている。しかしこの原稿はドストエフスキイの判断で

不採用になり、その後作者の手に返却された。しかもこの作品は、『ロシア報知』誌からも検閲および文芸上の理由で拒否されて、結局『ロシア世界』紙上に十八回にわたって掲載されねばならなかった。ドストエフスキイがここで『魅せられた旅人』の掲載を拒否したという事実は、そのうらに『わが郡のマクベス夫人』の原稿料未払いなどの事情があつたにしても、ドストエフスキイとレスコフの文学を考えるうえで、さらに深く考察されねばならない。一八七三年四月のドストエフスキイとレスコフの論争の背景として、少なくとも以上のことがらをふまえておかねばなるまい。論争の時間的な経過をふりかえるならば、およそつぎのとおりである。

まず『ロシア世界』紙第八七号（四月四日）に「読経者」という署名で編集部あての書簡「聖歌隊員の制服について」が掲載された。これは、『グラジダニン』誌に載つた「展覧会に關して」という文章に見られる聖歌隊員の服装についてのドストエフスキイの誤りを指摘している。ドストエフスキイが画家マコフスキイの描いた読経者の絵に触れて、「すべての聖歌隊員はこのような制服を礼拝のときのみ身につけており、大昔から、家長時代からそうされてきた」と書いたのに対して、『ロシア世界』紙の記事は、この服装はずっと後になってポーランドから取り入れられた借り物であり、大昔にも家長時代にも、聖歌隊員は、それとちがった長い黒の上衣を着ていたのだと説明する。文章のスタイルからすれば、ドストエフスキイに対する攻撃文と言つてよい性質の記事である。

ついで『ロシヤ世界』紙第一〇三号(四月二十三日)に「聖職者ベール・カストルスキイ」というペンネームの記事「妻帯修道士に関する独身者の見解」が掲載された。この記事は、『グラジダニ』誌第十五号と十六号に載ったネドリーンの小説「寺男。友人仲間のあいだでの話。ネドリーン氏作」の描写に見られる修道院規則に関する誤りを指摘している。妻帯者がロシヤの修道院にはいることができるというのは誤りであり、作中の寺男が歌ったような替え歌は実際には歌われていないというの、この記事の内容である。しかしここでも、作者のネドリーンよりも、これを掲載した編集者ドストエフスキイが攻撃の対象にされている。

それに対してドストエフスキイは、『作家の日記』第十章「仮装人物」(『グラジダニ』誌第十八号、四月三十日)でその反論を展開している。ドストエフスキイは、『ロシヤ世界』紙に異なったペンネームで書かれた二つの文章がいずれもレスコフの手になるものであることをはっきりと見抜いたうえで、逆にわざと回りくどい方法を用いて、皮肉たっぷりにレスコフを攻撃している。この論争にいたる過程を知っているわれわれにしてみれば、これが具体的な論点をめぐっての突りある論争というよりも、むしろ双方が悪口を投げ合う喧嘩の様相を呈している理由は理解できる。ことにレスコフにとっては、自作の『魅せられた旅人』がドストエフスキイによって没にされたことは腹にすえかねる出来事であったにちがひなく、喧嘩にかけては役者が一枚上手のドストエフスキイが、「仮装人物」という文

章で、皮肉を散りばめてレスコフを虚仮にしていると読むこともできる。しかし、じつはこの論争は、レスコフ、ドストエフスキイの双方にとって重要な指摘を含んでいたのではないだろうか。レスコフがペンネームを使って書いたドストエフスキイ攻撃の文章は余りに単純かとも思われるが、聖歌隊員の服装にせよ、修道院の規則にせよ、そうした事実、実に執着するレスコフの姿勢は、風俗というものに對するレスコフの視線の一端をたしかに語っている。それに対してドストエフスキイの方は、この文章のなかで、かなり真面目にレスコフ批判を展開しているのである。ドストエフスキイは「芸術の課題は風俗の偶然性ではなく、さまざまの類似した生活現象のなかからするとく洞察し、正確にとらえられた共通の理念なのだ」と書いたうえで、ネドリーン氏の『寺男』は風俗描写をめざすものではないと述べている。またドストエフスキイはこの文章で、僧侶風俗の描写というレスコフ氏の専門領域を侵すつもりはないのだとの皮肉をまじえながら、その領域においてもネドリーン氏の状況が有り得たことを主張し、論争相手には人間の心についての知識が欠けているのだと断定する。さらにドストエフスキイは、創作方法そのものに関わる本質的な議論に話を進めて、レスコフの名前を持ち出さないままに(しかし明らかにレスコフの小説を念頭に置いて)、登場人物がエッセンスで話をするのは偽物であると述べ、実際の商人や兵隊は一人としてそんな話しかたをしないと主張する。典型的な言葉として作家がノートに書きとめるような言葉は、十語のうちでひとつと言われるくらいのも

ので、書きとめた特徴ある言葉ばかりを人物にしゃべらせるや  
りかただと、結果的に真実から離れてしまうと主張するのであ  
る。(38)これがレスコフ文学に対する正面からの批判であることは  
一読して明らかである。しかしこれは、レスコフの側から見れ  
ばどういふことなのだろうか。

レスコフは、一八七〇年十一月に『ロシア報知』誌の編集者  
リュビエーモフあての手紙で言葉の典型性について語り、編集部  
が小説のなかの語彙を勝手に変えてしまうことに抗議している  
が、さらに友人ファレソフとの会話のなかでこんなことを語っ  
ている。「私は書くときに混同を恐れます。だから私の町人は  
町人ふうに話し、sをshと発言したり、1とrの区別が不明瞭な  
貴族はそのように話すのです。……民衆語や卑俗な言葉や気取  
った言い回しなど、私の仕事の多くのページを占める言葉は、  
私が作り上げたのではなく、百姓やインテリかぶれ、おしゃべ  
り屋や法律家や僧侶の間で聞きとったものなのです。」しかも  
レスコフは、人びとが言葉のことで彼を非難するのは、自分で  
そのように書くことができないからだと言及(39)、多くの批評家か  
ら人工的な文体として非難をうけた『夜ふかし』を例にあげな  
がら、叙述の様式化の成果を語るのである。また『道化のバン  
フロン』にはとくに自信を持っていたらしく、シュビンスキ  
イあての手紙でも、「この短篇は、私達の見ていない世界の言  
葉を作り上げ、その風俗を研究するためとくに時間がかりま  
した」と述べ、これが聖者伝ではめかされてある世界である  
こと、またこの短篇はさまざまに賞讃された他の多くの作品よ

り長生きすると考えていることを伝えている。

この論争で見ると、両作家の見解の相違は決定的なもの  
で、さらに一八七四年から七五年にかけてのドストエフスキイ  
の創作ノートに書かれた寸鉄詩「坊主ばかりを書き続けるのは  
／退屈にして流行おくれ／今度の筆は零落調子／落ちゆくなか  
れ、レ……フよ！」(39)を見ると、その反目がさらに続いていたこ  
とがわかる。

### III

一八七〇年代の両作家の発言からすれば、つまるところ、ヴ  
ィノグラードフにならって、ドストエフスキイとレスコフは、  
著作の性格も、芸術性の理解も、描写方法も、創作の思想的芸  
術的基盤も、諸性格の心理説明の方法も、芸術的現実の分析・  
評価方法も異なる作家として位置づけるべきなのだろうか。だ  
が両者の相違点を確認しつつ、同時に両者の共通性に目を注い  
でゆくならば、さらに深く両作家の文学を比較検討することの  
必要性が浮びあがってくる。

レスコフの『島人たち』にはドストエフスキイの『虐げられ  
た人びと』の影響があることがすでに指摘されており、さらに  
「ロシアの現実にはファンタスティックなほど矛盾だらけだ」と見  
る両者の視点についても、また両作家が描く肯定的主人公がい  
ずれもある種の変人であることも忘れるわけにはいかない。レ  
スコフが、ドストエフスキイの死後に、『作家の日記』に似た  
形式の文章を新聞に連載しようと考え、それを編集者スヴォー

リンに提案している点<sup>(43)</sup>にも、創作にかかわる両者の姿勢の類似性を見ることができないだろうか。レスコフは、ドストエフスキイの葬儀のあとに自分を訪ねてきた女性についての短篇(『クロイツェル・ソナタにちなんで』)を書いたほか、レオン・チエフがトルストイとドストエフスキイの宗教的異端性を非難したのに対して、それに反論し、さらにはドストエフスキイに献げる小説『貧者の群れ』を構想している。この小説は、結局のところ、ドストエフスキイの言葉「わが民衆は信頼できる——民衆は信頼に値する」を題銘に用いることを誓ったが、(1)うした一連の反応を見ると、レスコフがドストエフスキイに示した並並ならぬ関心の深さがうかがわれる。

一方、ドストエフスキイの姿勢<sup>(44)</sup>も、論争時の言葉の激しさとはいくらに、さらにレスコフとの関わりを見ることができ、それをもっともよくあらわしているのが、『カママーゾフ兄弟』の第六篇「ロシヤの修道僧」である。このなかのソシマ長老の言葉について、そこに聖者伝の様式化があることがバフチンによって指摘されているが、作者自身も手紙のなかで、「ソシマ長老の生涯における聖なる書物について」の章の原型をチーホン・ザドンスキイの説教からとったこと、叙述のナイーブな調子は修道僧バルフェーニイの遍歴の書からとったことを伝えている。こうした叙述の作りかたにレスコフとの共通性があることは明白である。しかもその共通性は、叙述形式にとどまらず、個々の章をつなげてゆく第六篇の構成自体にも見ることができ、そうした要素をレスコフの影響として見るべきか否か

は、さらに両者の著作を比較検討することによって明らかにされねばならぬが、少なくとも、両者の関係をウイノグラドフの見解で片づけられることがなさうことは明らかだと思われる。

- (1) A. Л. Волынский, Н. С. Лесков, СПб., 1898
- (2) A. Н. Лесков, Жизнь Николая Лескова, М., 1954
- (3) Л. П. Гроссман, Н. С. Лесков, Жизнь-творчество-поэтика, М., 1945

(4) Б. М. Другов, Н. С. Лесков. Очерк творчества. Изд. 2-е, М., 1961

(5) В. В. Виноградов, Достоевский и Лесков в 70-е годы XIX века.—В его кн.: Проблема авторства и теории стилей, М., 1961, стр. 485—555

(6) E. M. Пульхригудова, Достоевский и Лесков. (К теории творческих взаимоотношений).—В сборнике ст.: Достоевский и русские писатели, М., 1971, стр. 87—138

И. П. Видуэцкая, Достоевский и Лесков.—Русская литература, № 4, 1975, стр. 127—137

(7) К. П. Богаянская, Н. С. Лесков о Достоевском. (1880—е годы).—В кн.: Литературное наследство Т. 86, М., 1973

(8) В. Ю. Троицкий, Лесков-художник, М., 1974

И. В. Столярова, В. понсах идеала. Творчество Н. С. Лескова, Л., 1978



- (92) Н. С. Лесков. Собр. соч., Т. 10, стр. 357—358
- (13) О певческом дивре. Письмо в редакцию/Псаломшик/—Русский мир. № 87, 1873
- (32) Холодные понятия о женатом монахе. Заметка/Свящ. П. Касторский/—Русский мир. № 103, 1873
- (33) «ロマンは『ドストエフスキの生涯と著作』の中にその文章をドストエフスキの自録に加えねばならぬ主張の、ヴァンダラー・ド・メネの主張を引用してゐるが、これはたゞそれとイコンが一八九〇年に作成したドストエフスキの著作目録にすぎない。拙稿「ドストエフスキの『神話文化』第十八巻) 参照。
- (42) Ф. М. Достоевский. Дневник писателя за 1873 год. УМКА—Press, Париж, стр. 284—302
- (22) Н. С. Лесков. Собр. соч., Т. 10, М., 1958, стр. 277—278
- (29) А. И. Фаресов. Против течений. СПб., 1904, стр. 274—275
- (25) Там же
- (28) Письмо к С. Н. Шубинскому (19 сентября 1887 г.).—Н. С. Лесков. Собр. соч., Т. 11, стр. 347—349
- (26) Литературное наследство. Т. 83, М., 1971, стр. 363. 1) その「神話文化」(в захудалом роде) といふのは、同じ著者の「ドストエフスキの『神話文化』(Захудалый род) といふことである。
- (94) В. В. Виноградов. Проблема авторства и теория стилей. стр. 553
- (14) Е. М. Пухлятулова. Достоевский и Лесков.—Достоевский и русские писатели. М., 1971, стр. 92
- (32) И. П. Видуляк. Достоевский и Лесков.—Русская литература. № 4, 1975, стр. 135
- (32) Там же, стр. 136—137
- (42) Н. П. Богаянская, Н. С. Лесков о Достоевском.—Литературное наследство, Т. 86, стр. 612
- (24) Там же, стр. 606—612
- (24) М. Бахтин. Проблемы поэтики Достоевского. М., 1963, стр. 334
- (24) Ф. М. Достоевский. Письма, Т. 4, М., 1959, стр. 92